
Little Secret

FLASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i t t l e S e c r e t

【Nコード】

N 7 0 8 3 D

【作者名】

F L A S H

【あらすじ】

「ああっ女神さまっ」の二次創作小説です。螢一×ベルダンディーがメインとなっております。ベルダンディーが螢一に何か隠し事をしている。それを知りながら敢えて何も言わぬ螢一。まあ、ベルダンディーの隠し事ですからねえ……（笑）

夜のとぼりは、世界が休息のうちにあるようなという神さまの計らいかもしれぬ。

では、当の神様はどうするか？

他力本願寺。

昼ならばなんやかやと騒動の種には事欠かぬこども、いまはすっかり落ち着きを取り戻し、周囲には動くものの影とてない。

しんと冷え込んだ境内に、銀皿のような月が沖点高くから青白い光を辺りに優しく投げかけており、瓦屋根が霜が降りたようにきrameいていた。

本堂そばの森里屋敷も、玄関の常夜灯がわずかに辺りを照らすばかりで、部屋の明かりはすっかり落ちている。どうやら螢一や女神たちはみんな寝静まっているようだ。

この屋敷に住まいする女神たちにそのような休憩が必要なのか、そこははっきりしないところではあるが、少なくともここ森里屋敷では、それがすっかり習慣となっていた。

それは、共に住まう螢一の影響もあったかもしれないし、むやみにエネルギーを消費しなくて済むという判断があったかもしれないが、もっと簡単な言い方もできるだろう。

曰く、寝るほど楽はなかりけり、と。

いずれにせよ屋内には動きはなく、すっかり闇の中に――。
いや。

よく見れば、客間からわずかに明りが漏れているではないか。
中を覗き込むと、そこではベルダンディーが隅に寄せたテーブル

に向かっていた。彼女もこの家の習慣に従い布団の用意も済ませ、自身もパジャマ姿でありながら、肩にカーディガンを羽織って手元で何か作業を行っている。

編み物だった。

あたりをはばかりか、手元のスタンドだけが灯されたなか、彼女はひと編み、またひと編みと編み棒を進めていく。手の中で、毛糸が徐々にマフラーの形を取りつつあった。

どのくらい時間が経っただろうか。

やがてベルダンディーは手を止めると、そこまでの成果を子細に検分し始める。特に問題がないと分かると、彼女は満足そうに息をつき、肩の力を抜いた。

「もう少しで、できあがりね。……螢一さん、喜んでくれるかしら？」

完成したマフラーを渡すところを想像して、ベルダンディーの頬がかすかにほころんだ。

この冬に入ってから、彼女は手袋、セーターと次々に編み物を完成させていた。それらを手渡すたびに螢一は驚き、照れ、そして素直な笑みとともにそれらを受け取った。

『ありがとう、ベルダンディー』

いつもながら芸のない、と螢一はまた頭をかくのだが、その言葉はベルダンディーにとってかけがえのない価値を持つ言葉であった。一言一言が胸に染み渡り、体を包み込んで暖めてくれるような、そのような想いに満たされるのだ。

だから、彼女は今日も編み続ける。

——もう少しだけやって、今日は終わりにしましょう。

ベルダンディーはちらりと時計を見上げてから、再び手を動かし始める。

人間の習慣としてはひどく遅い時間となっているのは承知しているのだが、それでも手はなかなか止まりそうになかった。

「んが……ん？」

それまで静かな寝息を立てていた螢一は、うつすらと目を開くと、ゆっくりとあたりを見回した。

彼自身、何をしているのかよく分かっていないらしく、しばらくの間天井の模様を視線で追っかけまわしたりしていたが、やがて意識が覚醒してきたのか、むくりと起き上がると廊下に出た。

「うつ……」

しんとした冷気が体を締めつける。ぶるりと身体が小さく震えた。

「うう、さむさむっ……」

用件を思い出したのか、足音を忍ばせながら、螢一は薄暗い廊下を早足で歩いた。

どうやら、自然の欲求が後押ししていたようだ。

「ふう……」

落ち着きを取り戻し、自室に戻りかけたところで、ふと螢一は足を止めた。

「……？」

止めてはみたものの、自分自身なにに反応したのかよく分からなかったが、やがて違和感の原因に気がついた。

「あれ、明かりがついてら」

廊下の角、その向こうからうすぼんやりとした明かりが漏れてくる。螢一はなにげなく近寄ると、障子越しに声をかけた。

「ベルダンディー、まだ起きてるのかい？」

一瞬、中の動きが止まる。

『螢一さん？ まだ起きてらしたんですか？』

「いや、ちょっと目が覚めてさ」

『あ、もしかして眩しかったですか？ すみません』

「いや、そんなことはないけど……。開けてもいいかい？」

『は、はい、どうぞっ』

なにかごそごそと音が聞こえたが、螢一はあまり気にもせずに障子を開けた。

「もう3時かあ……。こんな時間まで、どうしたの？」

「あつ、はい。少しやりたいことがあったものですから……」

「ふうん……？」

螢一は小首を傾げたが、やがてそれは大あくびへと姿を変えていった。ほわほわと眠そうに目をこする螢一の肩に、ベルダンディーはそつと手をかけた。

「まだ朝まで時間がありますから、お休みになってはいかがですか？ 私もう寝ますから」

「そうかい？ んー……。それじゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

廊下がきしむ音がだんだんと遠ざかっていき、やがて障子の締まる音がかすかに聞こえてくると、ベルダンディーはほつと息をついた。

螢一に見つからなかったという事実よりも、彼になんだか隠し事をしているような、申し訳ないような感覚が彼女の心を波立たせていた。

「でも、秘密にしておいた方が螢一さん、びっくりするだろうし……。ごめんなさい」

ベルダンディーは螢一の部屋の方に向かい小さく頭を下げると、手早く片付けを済ませて床に就いた。

このあたり、最近ウルド辺りなどが「人間の女の子のような」と評するゆえんであろう。

一方の螢一は、素直に布団に潜り込んでいた。もともと寝ぼけ気味だった眼はあつという間に閉じられ、意識はとろとろと再び溶解し始めていた。

だが、かすかに何かが引っかかる。

——こんな時間まで、ベルダンディーは何を……？　それに、やりたいことってなんだったんだろう？

「こんな時間までやらなきゃいけないなんて、なにが一体……」

口に出してつぶやいたつもりだったが、すでにそれはわずかな唇の動きと、わけの分らないふにゃふにゃとした声にしかならなかった。

——なんだろうな……？

そこまで考えて、ふっ、っと螢一の意識は途切れた。

ちなみに、ベルダンディーがパジャマ姿だったことに気がついたのは、翌朝おきてからしばらく経ってのことであった。

「おはようございます、螢一さんっ」

「あ、ああ、おはよう」

「どうかなさいましたか？」

爽やかな朝日とともに笑顔で現れたベルダンディーを、螢一はまじまじと見返すと、思わず視線をそらしてしまった。

もしかしたら、顔は少し赤くなっていたかもしれない。

「えっ、い、いや別に、なんでもないよ。ははは……」

「そうですか？　朝ご飯の用意ができてますよ」

「ああ、着替えたらすぐに行くよ」

ご飯と豆腐の味噌汁、焼き魚に漬物と玉子焼き。

どこにでもありそうなありきたりのメニューでありながら、そこにある食事はそこいらの料理とは違う輝きを放っているようであった。

螢一はいつもの通り、その妙味に舌鼓を打ちながら、一品一品を心から楽しんでいた。

「お味は、いかがですか？」

「うん、おいしいよ。なんていうかさ、いつも同じ言葉で悪いんだけど……」

「そんなことはありませんよ。私は、その言葉が聞けるのがとっても嬉しいんですから」

「は、はは……」

「ふふっ」

ある意味一人身などには破壊的な威力を発しそうな朝の会話であった。

食事も済ませ、茶で一服していると、不意に昨夜のことが思い起こされた。

「そういえばさ……」

「はい？」

片付けをしていたベルダンディーはその場で振り向くと、螢一の次の言葉を待ったが、彼は何か言いかけたところで再び口を閉ざしてしまった。

「……あ、いや、なんでもないんだ。ちょっと勘違いしただけだから」

ベルダンディーはことりと小首をかしげていたが、やがて笑顔を浮かべると台所へと姿を消した。

洗い場の方から水音と楽しげな歌声が聞こえてくる。それを聞きながら、螢一は昨夜のことを思い返していた。

「ま、いいか」

——彼女にだって、秘密のひとつやふたつあるだろうしな。言えることだったら、たぶんとっくの昔に言ってるだろうしな。そのうち話してくれるだろうさ。

一級神であるということだけでなく、彼女がなにか後ろめたいことを隠しているようには、螢一にはどうしても思えなかった。気にならないといえば嘘になるが、待ってみても悪いことはないはずだった。

そう決めてしまうと気が楽になったのか、螢一は残りのお茶を楽しみ始めた。

だが、その「秘密」とやらは、意外と早く、あっさりとばれることとなった。

その日の夜。螢一は机に向かい、毎度のことながら課題に取り組んでいた。

とはいえ今回はたいした問題があるでもなく、むしろ明日の予習みたいなものである。

それもほとんど終わると、彼はすっかり固くなっていた体を大きく伸ばした。

「ん、んゝんっ、はぁ……」

全身が弛緩し、再び血流が流れていくようなあの心地よさを背に、ゆっくりと後ろに倒れこむ。

「……ん？」

螢一はむくりと起き上がると、あたりをきよろきよろと見回した。いつもと、なにかが違っていた。

「あ、そうか……」

そう、いつもなら計ったようなタイミングでやってくるはずのベルダンディーが、今日に限ってはまったく姿を見せなかったのだ。

「どうしたんだろうな？」

つぶやいてから、彼ははっと表情を改めると、軽く自分の頭を小突いた。

自身のつぶやきの中に、かすかに不満げな調子が混じっていたことに気がついたのだ。

「なにを言ってるんだよ、俺は……」

自分がひどく傲慢になったような気がして、頬が熱くなる。何気

ない、だが優しい心遣いに自分は感謝を捧げていたはずではなかったのか。

いや、今もその心が変わりはない。だが、少し忘れかけていたかもしれないなかった。

人間である以上、そういうことはままあるものだが、今もまた。

「……そうだったよな。ありがとう、ベルダンディー」

初めて彼女のお茶を飲んだ時の味が、口中によみがえってくるような思いがした。

初心を思い起こすことができたのはいいとして、まあそれはそれ、これはこれ。

ベルダンディーが姿を見せないという事実には変わりがなかった。

「……本当に、どうしたんだろうな？」

自戒と反省が喉もとを過ぎれば、今度は不安がせりあがってくる。螢一は参考書を閉じると、そっと部屋を抜け出した。

そろそろ日付も変わろうという時間だけあって、辺りは静かだった。隣からも奥からも、これといって物音は聞こえてこない。

ウルドもスクルドも、このあたりはすっかり地上界の習慣に順応したようである。

さればと目を転じると、客間の障子がほんの少し空いており、そこからまたもやほんのりとあかりが漏れている。

「まだだ……。一体なにをやってるんだろうな？」

昨日のことが思い出され、螢一は忍び足で障子に近づくと、そっと中を覗き込んだ。

「あ……」

漏れかけた声を、慌てて抑え込む。ベルダンディーは机に向かいながら、一心不乱にマフラーを編みつつづけていた。端の方に「K1」と織り込まれている。

「そうだったのか……」

胸の中でなにかがすとん、とはまりこんだ。彼は気づかれないよ

うに居間へと滑り込むと腰をおろす。

なあんだ、と思った。

正直言ってしまうえばそんな感じだった。分かってしまえば単純なことであつたが、得心できたことに変わりはない。

だが同時に、その想いは暖かさに満ちていた。

「でもなあ……」

螢一の表情がかすかに曇る。腕時計を見れば、もうすぐ2時を指そうとしていた。

自分のために何かしてくれているのはありがたいことではあるが、あまり根を詰めるのもどうかと思う。

——こういう作業だって、まったく力を使わないわけじゃないと思うんだけどな……。どうなんだろう？

今まで見て、聞いた限りでは大丈夫そうにも思えるが、はっきり分からないのがなんともおかしい。それに、お礼というわけでもないけれど、なにか自分にできることはないだろうか……？

あたりを見回していると、あるものが螢一の目に飛び込んできた。「あ、そうか。じゃ、こいつで……」

彼は再びそつと立ち上がると、音もなく台所へと姿を消した。

最後のひと編み。

ベルダンディーは編み棒を置くと、できばえのチェックに入った。マフラーは網目も良く揃っており、ぱつと見たら市販品か何かと間違えそうだ。

大きな違いがあるとするれば、そこに込められた想いの大きさであろうか。

「……ふふっ」

ベルダンディーは明日彼がどんな表情をするかを想像し、微笑みとともにマフラーをそつと抱きしめたが、時計を見てはっとした表

情を浮かべた。

「いけないっ！　もうこんな時間！？」

少なくとも30分ほど前には螢一にお茶でも出そうと思っていたのだが、夢中になるあまりつい失念してしまったようだ。ベルダンディーは慌てて立ち上がったが、その時、障子が軽く叩かれた。

『ベルダンディー？』

「……螢一さんっ？」

彼のほうが先に声をかけてきたことに、ベルダンディーは思わず驚きの声をあげた。

「螢一さん、すみませんっ。あの、今お茶を……」

からりと障子が引き開けられた。螢一は笑顔を浮かべながら軽く手を振る。

「あはは、別にいいよ。それよりも疲れたろう？　……その、お嬢様、お茶でもいかがですか？」

「……えっ？　お茶ですか？」

ぎこちない台詞は似合わないことこの上なかったが、その言葉に、ベルダンディーは思わずオウムのように聞き返す。

「うん。さっ、こっちへどうぞ」

「は、はい……」

まだいまひとつ飲み込めぬが、ベルダンディーはマフラーを手にしたまま客間を出た。

「まあ……」

感嘆の声が流れる。

居間のテーブルの上には、以前ふたりで買い求めたティーカップがふたつ仲良く並んでおり、その傍らに以前螢一が買い求めたティーサーバーが置かれている。サーバーの中では紅茶の葉がゆらゆらとジャンピングを繰り返していた。

「これは、螢一さんが……？」

「うん、前にこれを買った店の店長さんに教えてもらったのを思い

出しがらね。……おっと、いけない」

慌ててストレーナを押し込み茶葉を抑えると、螢一はルビーにも似た色の液体をそっとカップに流し込んだ。たちまちあたりに清冽な香りが流れ出した。

「わあ……」

「さ、どうぞ」

「あ、はいっ」

ベルダンディーはそっとカップを取り上げ、口をつける。少し渋みが強い気もしたが、十分に紅茶の味は楽しめた。

「おいしい……」

「ちょっと手間取っちゃったけど、ど、どうかな？」

「すごく、おいしいです。螢一さん、ありがとうございますっ」

「いや、俺のほうこそ言わなきゃ。ごめん」

「え？」

ことりとベルダンディーが小首をかしげたのを見て、螢一は慌てて手を振った。

「あ、いや、なんでもないよっ」

そう、自戒はそつと自分の中にしまっておけばいい。

「それよりさ、さめないうちに飲んじゃおう、ね？」

「あ、はいっ」

物音ひとつしない深夜、穏やかなひと時が流れた。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

「そ、そうかな？」

「はいっ」

自然そのものの笑顔を浮かべたベルダンディーを見ると、螢一も自然と頬が緩んできた。

——よかった。

その喜びに流されかけ、ようやくのところで本題を思い出す。

「ここのところ遅かったのって、そのマフラーを編んでたんだね」

「えっ？ 螢一さん、ご存知だったんですか？ 隠してたつもりだったんですが……」

「ん、ああ、まあね」

――ていうか、手に持ってるし。

子供のかくれんぼでも、もう少し上手にかくれるのではないだろうか？

まあ、そこがなんともベルダンディーらしいともいえるし、螢一自身気がついたのはほんのついさっきの話なのだから、えらそうなことをいえた話ではないのであるが。

「そうですか……」

悲しげに目を伏せたベルダンディーに一瞬見とれたあと、螢一は彼女の手からそっとマフラーを受け取った。

「これさ、もしかして……俺のかな？」

彼女は少しだけ逡巡したあと、頬を染めながらうなずいた。

螢一の胸の中を、あたたかいながなが流れていく。彼はそのままマフラーを巻きつけてみた。

「あ」

「ありがとう、ベルダンディー。その、とってもあったかいよ」

「……はいっ」

想像した彼の笑顔が、今日の前にあった。ちょっと予定とは違ったけど、変らぬ彼の笑顔に、何かが彼女の胸を突き上げた。

「螢一さんっ」

「お、おわっ？ ベ、ベルダンディー？」

あっと思ったときには、既に螢一はベルダンディーに抱きしめられていた。柔らかな温もりに、螢一の頬が一挙に熱を持つ。

「どどど、どうしたの？」

「なんだか、嬉しくって……。ありがとうございます、螢一さん」

目元にかすかに涙さえ浮かべながら寄り添うベルダンディーにしばしの間螢一の脳はオーバーヒート寸前の勢いで回転していたが、やがて彼はこの場で恐らく最善であろうと信じる行動にでた。

すなわち、彼女をそつと抱きしめ返したのである。

ベルダンディーのちょっとした秘密から生まれた、ふたりだけの秘密の時間。

あとを知るのは、窓の外の星々ばかり。

どうぞふたりで、よい夜を。

（おわり）

(後書き)

2008年初の女神さままつ作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7083d/>

Little Secret

2010年10月8日15時56分発行